現地で活動した国際要員の声
難民×薬剤師

薬剤師　榊本　亜澄香

最新の派遣先：バングラデシュ（ERU※1）

プロフィール紹介

兵庫県生まれ。日本赤十字社和歌山医療センター勤務。

派遣歴：ネパール（2015年）、バングラデシュ（2017年）

国際要員を目指したきっかけ

「何か自分にしか出来ないようなことで病院の役に立ちたい」と模索していた頃、たまたま入った院内学会のブースで、海外での医療支援活動にあたった職員の発表を聞き、「こんな世界もあるのだな」と知りました。その後、国際救援を担当する部長さんに声をかけていただき、当時薬剤師として院内から海外に出た人はいなかったこともあり、これなら役に立てるかもしれないと思い、目指し始めました。

国際要員として登録されるまでの道のり

手始めに英語の勉強を始め、TOEICのスコアが伸びてきた段階で「集中英語研修」という2か月間の語学研修に参加させてもらい、必要なレベルをクリアしました。国際要員の登録研修を修了し「私、これで行けるんだ」と実感したとき、薬剤部長をはじめ、応援してくれた上司や同僚に恩返しがしたいという気持ちが湧いてきて、「派遣に行きたい！」と初めて強く思いました。

現地での活動のやりがいは？

バングラデシュの難民キャンプで救援活動にあたったときのことです。ある日、医師から足を負傷した男性のことで呼ばれました。状態は非常に悪かったのですが、医師は、「今後の治療によっては、この人の足を切り落とさないでいいと思う。僕は、この男性の回復力にかけたい。けれども、それには薬が必要だ」と、私に薬の手配を依頼しました。

それは、とても高価な薬でした。一人だけに多くの資材を投入することが果たしてよいのか…。男性は29歳、お子さんもいてご家族のことを考えると「何とか助けたい」と葛藤しました。

必死に探していたところ、赤十字のネットワークを活用して譲り受けていた薬の中にその薬が十分量あることが分かり、男性に投薬することが出来ました。後日、再び医師に呼ばれてその男性のもとに行くと、足は驚くほどきれいに治ってきていました。その場にお子さんもいたのですが、「もう切らなくてもいいね！」という医師の言葉を聞いて、男性の周りを大喜びで飛び跳ねていた姿が今でも忘れられません。

今後の目標

メドログ※2として、書類作成、薬剤・医療資機材の調達、その国の法令順守、在庫管理など、押さえるべきことが数多くあります。日赤の国際要員として登録される薬剤師はまだまだ少ないので、皆と研鑽を積みながら、次の派遣に向けてスキルアップを目指していきたいです。

国際要員を目指すみなさんへ

「健康第一であること」、また、私自身が先輩に言われ続けていることなのですが「日常業務を大切に」して頂きたいと思います。派遣に出るためには、普段の仕事を通して信頼を得ることが大切です。また、日赤が海外に派遣する医療チームには、通常、薬剤師は1名しかいないので、自身の健康を保つことが一番の礼儀であると考えています。

※1 ERU(Emergency Response Unit: 緊急対応ユニット)は緊急事態・大規模災害発生時に備え、いつでも出動可能な専門家と、すぐに医療や給水衛生活動などが開始できる資機材をセットにしたチームです。

※2 メドログとはMedical Logisticsの略で、薬剤師としての業務に加え、薬剤、医療資機材の調達・輸送、倉庫での保管・管理などを担当するポジションです。